



1955-1961

# 右手に竹棒、左手に石。 スパルタ教育で近畿大会出場。



## 驚異の合格率98%

我々18期生にとって六甲での6年間の思い出は、“ようしぼられたなー”の一言の尽きると思います。

学校生活においては、故武宮隼人校長先生より、18期は六甲始まって以来最低最悪の学年である、父兄会の度に叱責され、我々自身にも勉強はしない、品行はよろしくない、と御叱りを毎日の様に受けたと覚えております。そのためか他の神父さん、先生方よりも他の学年の数倍の“特訓”と言う名の現在で言う“シゴキ”、(当時は特別訓練)を賜わったと覚えております。

その甲斐有ってか、我々18期は、馬鹿は馬鹿なり(一部秀才も居ります)に分相応の大学を受験し合格率98%と言う成績を残し、先生方の特訓にお答えしたのが、唯一の楽しい思い出として残って居ります。

さて我々18期のサッカー部での思い出を、古い記憶の中から思いお越しながら書いて見たいと思います。

六甲サッカー部の思い出の中で絶対に欠かせない、故ヒルケルさん(通称ブタコック)、普段の日でも仕事の合間に我々の練習を遠くから見守り、日曜日に試合が有れば必ず応援に駆けつ

け、おせじにも上手とは言えない日本語で“ガンバレヨー、アホッ”の一声、今考えるとなんとも奇妙な声援でしたが、当時はその一声(と言うよりも彼の作ってくれたシチューの味を思い出して)で後半頑張った様な記憶が有ります。

夏の合宿では、我々子供の料理を見かねて毎日コッソリ神父さんの料理用の材料を持ってきて我々の料理をしてくれたのを昨日の様に思い出します。

佃先生

思い出が多過ぎて、何から書いていいのか…

中学1年の秋に入部し、佃先輩とは中

学2年の夏の合宿から現在に至る37年間の御指導を戴いている事になります。

中学2年夏の合宿、何も知らず単に普通の練習と思い参加、翌朝6時半起床と同時に運動場に集合、見たことの無いおっさんの指導で柔軟体操と称しわけの分からん体操をさせられ30分後クタクタになり、7時よりの朝食も喉を通らないまま、8時よりの練習、午後は13時より16時迄練習、練習終了後ボールに油を塗り、糸の切れた所を縫い、先輩の検査を受けた後、反省会、夕食、でナガーイ、一日が終わったと覚えて居ります。

このわけの分からんおっさんこそ、当時日本体育大学二回生“佃幹夫先輩”でした。

以後毎年夏の合宿には、どの様に都合を付けられるのか必ず参加され、心のこもった指導を戴き、毎年合宿終了後退部を考えたのは私一人では無かったと思います。

高校1年生の合宿終了後、我々は佃先輩の来年大学卒業を心より喜んだのも、束の間翌年4月新任体育教師として着任、失望のどん底につき落とされたのを、昨日の様に覚えております。以後、佃先生に徹底的にスパルタ教育で鍛えられ、その甲斐有って六甲学院創設以来初めて“近畿大会”に出場の栄誉を得る事が出来た事は我々18、19期の諸君の心の中に大きな記念碑となっていると私は信じております。

今では信じられないような、佃先生の右手に竹棒、左手に石、横に中学生の練習風景、今でも時々思い出します(練習中失敗をしたら、近くにいれば竹でカツ、少し離れると石つぶて、石の届かない所にいると中学生に先輩のケツ蹴飛ばしてこい)、今になればいい思い出ですが、当時は有りとあらゆる暴言罵声で影で罵ったのは私だけでは無かったと思います。

我々18期は佃先生の新任教師としての最初の教え子として、情熱溢れる指導を受け近畿大会にまで導いて戴きながら、大学で唯一人としてサッカーを続け得なかったは、サッカーに対する情熱を佃先生と伴に六甲のグラウンドで

燃焼し尽くしたのではないかと感じて居ります。

我々も51才、人生に少し疲れを感じる今日このごろ、30数年前の青春時代を思い起こす時、何か新しい血がわき出て来る様な気持ちに成ってきております。

六甲サッカー部OB諸氏の御健勝と、現役サッカー部の今後の発展を祈りながら筆を置かせて戴きます。

[太田 省司]

